

図書報だより

号数 第 25 号
発行日 昭和 49 年 2 月 1 日
編集 島根県立図書館
発行 松江市内中原町 52
TEL (0852) 22-5725
印刷 脩高浜印刷所



古墳の発掘

古墳時代といえは3～7世紀ごろ、ざっと400年ほどであるが、あたかも古代国家成立期、神話・古傳形成期にあたり、古墳は端的に当時の社会を反映している。

一昨年加茂町神原の古墳で、魏の景初3年鏡が出て注目されたが、それは邪馬台国の使いが持ち帰った可能性強く、当地豪族は邪馬台かその後身の傘下においてその鏡を入手した可能性がある。安来市造山1号墳の日本製の鏡は、大和・関東出土鏡と三面同じ型で鑄た品であることが近ごろ報道された。これは畿内政権の握る鏡作が作り、分与されたとみるべきだろう。とすれば、当地豪族はすでに畿内政権下に属したことを思わせる。

古墳は大小新古さまざまあるが、小古墳のみの村むらでも、5世紀ごろから多数現れはじめ、その中に少数有力者が目立ってきて、6・7世紀には小地域の支配者らしいものの成立する姿を示し、地域社会の律令制前夜を考えさせる。古墳の重要度は大小や遺物の質・量だけでは論じえない。小古墳もその地域にとっては、地域の歴史を探るにかけがえのない宝である。

古墳は外見だけでも、年代などある程度推測できるのは、初対面でも何ほどかその人柄を知るのに似ている。だが的確な内容は綿密な発掘調査が必要である。神原の古墳で最近石室のそとに供献土器の埋納塚が検出され、前例のない施設とされている。従来の多くの調査はそこまで行き届いていなかったためと思われる。安易な発掘は後の世代に対し重要な事実を永久に闇に葬り去ることになりかねない。発掘の責任は重いのである。

山 本 清

露出したまぼろしの 城下町

広瀬町文化財専門委員

妹尾 豊三郎

広瀬町にある月山富田城址は、山陰でも屈指の古城址である。伝説によると保元、平治の頃、平家の侍大将悪七兵衛景清（東比田藤内家の古記録によると平宗清）が築城したといわれ、出雲私史によると初代城主は佐々木五郎義清ということになっている。



この富田城の全盛時代を築きあげたのは、尼子氏時代で、経久の大永

年間には、陰陽11ヶ国に覇を唱えるにいたった。

さて、ここに城が築かれたとなると、当然月山山麓には根小屋が発生し、それは城主の勢力の伸長に伴って城下町に発展して行ったであろうことは想像に難くはない。これも伝承によることだが、尼子の盛時その城下町は南は福頼（月山山麓から南方1キロ）から北は中海の赤江の海岸までえんえん10キロにわたり、富田川と平行してその東側に展開していたと伝えられている。

広瀬藩のお抱絵師堀江友声が描いた富田城下町絵図という巻物があるが、これは広瀬九代藩主松平直諒の下命によって描きあげたもので、廃藩置県後十代藩主直巳が上京の際、「寺宝とせよ」といって、その菩提寺城安寺に残しておいた物である。

堀江友声と言えば、この地方における当代一流の画家であった。それが藩公の下命を受け心魂を傾けて描きあげたものであるから、たとえ想像図であるとはいっても、全然荒唐無稽の絵そらごとのみの作品だとは思われない。富田城下町絵図というものは、

この外にも数点あるが、その構図は大体において、友声描く所のものと同小異であって、いずれも明治初年前後の製作である。これによって見るとそれ等の城下絵図は、友声の描いたものを粉本として、その子の有声がまず描き、更に好事者たちによって摸写され、次第に傳播していったものと思われる。

富田城下町は、広瀬藩が創設された寛文六年秋の洪水によって、全街悉く掃蕩の憂目を見るに至ったが、恐らく流れを替えた富田川河底に再び日の目を見ることなく埋没し去った謎の城下町は、これを惜んでやまない故老たちの伝承によって、僅かに後代へ言いつぎ語りつがれていったものであろう。

広瀬九代藩主松平直諒（特に広瀬の山河を愛し在国中広瀬で死んだ。その墓は城安寺お墓山にある）は富田城の史跡と曾っての城下町に限りない愛着と郷愁を感じ。

「今からでも遅くはない。詳細調査の上絵図に描いて後世に伝えるように」

と言う配慮のもとに、この絵図を描かしめたものと思われる。

藩公のそうした関心と配慮とは、今日的に言えば、さしずめ文化財の愛護と保存につながる精神であって、今日なお我々が感銘して措かない所以もまたここにある。こういう因縁につながる富田城下町遺構が300年後の今日において、再び我等の眼前に、かつての姿（一部ではあるが）を現したということは、まことに稀有の現象で、それは恰かも死児が甦って来たと同じ驚嘆でなければならなかった。

この城下町遺構が露出し始めたのは、昭和40年頃からで、それにはそれなりの理由があった。即ち飯梨川（昔の富田川）上流に十数ヶ所の砂防ダムが設けられた上に、富田橋下流十米あまりの所に橋脚保護の砂防堰堤が築かれたので、上流からの流砂が完全に食い止められたばかりでなく、下流鷺の湯附近からは多量の川砂をすくいあげた。そこで、富田橋砂防堰堤から下流へかけて約三米あまり川床が低くなり、人工表土の富田城下町遺構が露出するにいたったのである。

第一期の露出は富田橋から新宮橋までの間約二百米（川幅150米）であり、第二期は新宮橋下流更に二百米、第三期は昭和48年夏の渇水期で、更に下流



二百米あまりが露出し、結局富田橋下流六百米間において、三百年前潰

滅した富田城下町遺構が再現するにいたった。

ただ遺憾なことには、そこは完全に富田川の川底であったので、折角露出した地点も、間もなく水勢によって崩壊され、その崩壊のあとを追かけるように次の地点が露出するといった工合で、露出と崩壊との悪循環をくり返ししながら次第に上流から下流へ露出を続けていった。

かような状態であったので、露出し始めてから今日まで八ヶ年の時日を経過していたにも拘らず、この稀有なる珍現象もその価値が世論化されるに至らず^{じんぜん}往^{せん}再日を過して行った。が、然し昭和48年夏の異常渇水を機に、この城下町遺構も漸く世人の関心を惹く時運に際会するに至った。

この城下町の本質については夫々専門分野の人々によって正確に究明せらるべきもので、勝手な憶測によって片付けてしまうことは出来ない。ただ其処は上述のように露出と崩壊とを繰り返した特殊地域であったので、まことに古歌にある「世の中を何にたとえんあすか川昨日の淵は今日の瀬となる」そのままの所であったと言えよう。だから我々として出来得ることは、露出面を測量して図面にうつす、その場所々々の遺構を写真にうつす、放流している物件を採集する程度の事をするのが関の山であった。

幸にしてこの地域の蒐集品は、露出し始めた時点から今日に至るまで、熱心に蒐集を続けて来た藤原久良、桑原英二氏等の手によって数千点が広瀬町内に保存されている（役場にもその寄贈品が多い）これ等が今後の研究に如何に貴重な資料になるかは言うまでもない。

中世期の遺構が現代に於て露出し発掘された例としては、福山市を流れている芦田川の川床から露出した草戸千軒町、並びに越前一乗谷の浅倉義景居館跡などがあるが、わが富田城下町遺構もそれ等と肩

を並べて毫も遜色のない価値ある住居跡でなければならぬ。旧臘広瀬町教育委員会の歴史講座では、昭和48年度の最終の試みとして、歴史の旅というもの企て岩国、鞆の浦、高梁町などを歴巡して帰って来たが、福山市では草戸千軒町の遺構を訪ね、岩国天守閣に陳列してある千軒町遺構の出土採集品を見学した。これを見るとあまりにも富田城下町遺構の蒐集品と類似しているのに驚いたが、一面では広瀬町に保管されてある蒐集品の方が質量ともに勝るものではないかとの反省もさせられた。

幸いにして広瀬町もこの城下町遺構については、国及び県の指導をうけ、継続事業としてこれが究明に乗り出す意向であるので、現地に暴露のまま放置されている炉跡、井戸跡、住居跡、立木、土台石等の立体的な調査、並に蒐集されてある陶磁器、石器、鉄器、木製品などの時代的鑑別などによって、案外尼子勢力圏の謎をとくような貴重な資料ともなりかねないのである。

昨年八月下旬、広瀬町教育委員会は写真撮影と実測による緊急調査を実施することとなり、調査団は山本清氏を団長に、県教委文化課の係員によって行なわれた。その時調査の対象となった地域は、新宮橋の下流約五百米ばかりの川原であったが、長さ二百米、幅三十米の範囲に建物跡七棟、井戸跡九個が露出していた。建物遺構は長方形で周囲に建物の区割を示す列石や雨落ち溝などが露れており、うち三棟には石組井戸、一棟には木製井戸も残っていた。

井戸は九個のうち八個までは石組み井戸であった



が、他の一個は木組のものであった。木組の井戸は石積の井がわに木製井

筒をはめこんで作ったものである。

富田川遺稿の現況についてはあまり誌す紙面に許されなくなったが、昨年度の調査の結果については、県教委文化課の前島己基氏が季刊文化財第22号の冒頭に掲載されているので併せて御参照頂けば幸である。

著書と私（その1）

史詩「鹿介物語」

松江市川津公民館長

音 羽 融

たしか昭和17、8年のころであろうか、私が能義郡広瀬小学校に勤務していた時代のことである。

たまたま読んだ林房雄の「西郷隆盛」のあとがきに、歴史小説は史実と信実の接点において書かれなければならないというような意味のことが書かれていた。当時文学の道を志してはいたが、歴史には専門でなかった私ではあったがこれなら郷土の英雄として称えられている山中鹿介を題材とした作品をものすることができはしないだろうか、柄にもないことを考え出してきた。ちょうどそのころ読んだ北原白秋の叙事詩「海道東征」の表現形式に刺激され、ホーメロスの「イーリヤス」、「オデュッセイア」に負けない史詩を書いてみたいと、今から思えば恥しくて、人にも言えないような野望を持ってきた、これも若気の至りであろうか。

まず、そのためには、どこまでも史実としては正確であり、しかもその中に自由奔放な解釈が加えられねばならない。その準備として、昭和21年に「月山物語」を出版して鹿介の活躍舞台であった月山の研究を行った。

さらに昭和26年には「尼子物語」を出版して、鹿介を生み出した時代的背景の研究をした。少し横道にそれるが、トレーニングとして書いた「月山物語」が案外評判がよく、三版まで出したことは面はゆい気持である。

さて、「鹿介物語」は昭和36年に出版したが、その表現形式としてとった叙事詩形体は、あまりにも象徴的になり、史実のわからない読者に難解、誤解を与えるのではないかと思ひ、随筆風な註をつけることにした。ところが本文の詩はあまりほめられないのに、註はきわめて評判がよく、ほめられているのやら、くさされているのやら分からない、暗然たる気持になった次第である。

これが縁になって郷土誌を三冊（「ばくらの西谷」・「片江郷土誌」・「大野郷土誌」）を執筆し、目下、二冊ばかり手がける破目に陥っている。

私も早くこの世界から足を洗い、私本来の文学生活に専念したいものだと思っている。二度とない人生のためにも。

著書と私（その2）

「出雲石見地方詩史50年」

のこと

松江市教育委員

田 村 のり子

「島根の詩史を今書かなければ詩人たちの業績は永遠に消えてしまうから」との、三成町出身東京在住の詩人安部宙之介先生の懇望にこたえて、山陰詩人クラブ十周年記念事業ともして私がこの仕事にかかったのは昭和42年夏、完成したのは同47年秋である。

島根に口語自由詩が起った大正中期から以後50年間の詩の歴史を、グループの活動と主要詩人列伝を軸に体系化した本書は、文学史であると同時に島根の精神史、社会史ともなるべきだし、日本全体の詩史の一単位として有機的に組みこまねばならなかったし、そのためには誰にも納得できる史的評価、史的位置づけができなければならない。すべての面で客観的公正な判断力が要求され、まことに力に余る仕事であった。

土地の中にいて土地の人々を筆に上せるのは捨て身の覚悟も要した。幸い、多くの先輩詩人の協力を得て資料や談話を提供して頂き、刊行に当っては島根詩史刊行会が組織されて多くの理解者の物心両面の援助に支えられ、こうして本書は成った。いってみればこの本は私一人のものではないのである。公刊後全国各地の新聞雑誌等に載った書評の中にはそのことを指摘して、みんなで力を合せて詩を大切にしている島根の人々の心を美しいものとしてとりあげているものが幾つかあった。

ご苦労でした、これで安心、と先輩詩人達に感謝されたのも嬉しかったが、先人の努力を知り新たな詩への勇気がわく、との現役詩人達の決意をきくと私喜びはひとしおである。それこそが本書を著した私の心だから。

なお本書は昨年度の日本詩人クラブ賞を受賞した。受賞理由は「右は同地方詩史に公正な判断を下し、歴史的に整理考究し、かつ日本詩の地方的重要性を明らかにした点まことに賞すべき著作である」というものである。

読書利用傾向調査

—館外利用者の結果まとまる—

〈調査目的〉

自動車文庫“しまね号”を利用する団体、グループは約80、その利用人口は2,500余名に及んでいる。

このことは、身近な場所で利用できるという自動車文庫特有の長所の現れとみられる。しかし反面隔月1回の巡回や、限られた駐車時間、積載冊数など必ずしも利用者の要求に副わないこともあって不満の声が聞かれるのも実情である。

これを分析すれば「読みたい本が見つからない」「積載冊数が少なく選択できる範囲が狭い」とい

うことではなかろうか。

この苦情を解消するには、現場での適切な読書相談や、リクエストサービスの徹底などが必要であり、また図書館車1台では不十分な点もあるが量的なものは勿論のこと質的サービスの向上を図ることこそ公共図書館として大切な役割である。

そこで利用される団体、グループの読書量や、読書の動機、目的などを追究し、その実態をは握して図書館が行なう読書普及、サービスエリアの改善に役立て、奉仕活動の充実と拡大を図るためこの調査を実施することとした。

以下調査結果の概要を述べる。

〈調査方法〉

1. 調査対象の選び方

調査は各配本所毎に自動車文庫を利用する満15才以上の男女を対象とし、各調査対象の選定は無作為抽出法による。

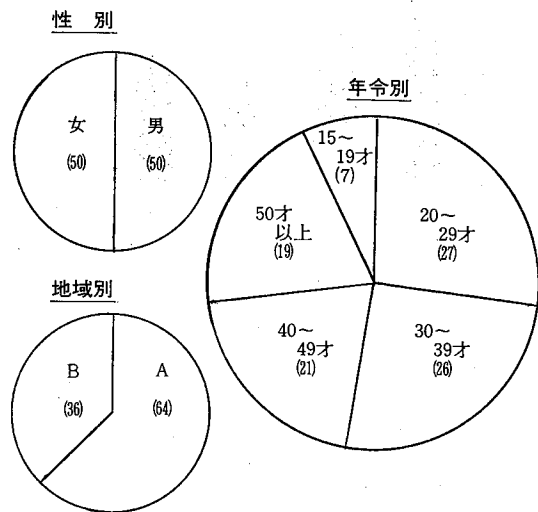
先づ50カ所の配本所を純農村地帯、都市近郊農村地帯に大別して、届出会員数や、常時利用者人数などの調整をおこない調査総数を1,000件に限定した。

2. 調査の時期と方法

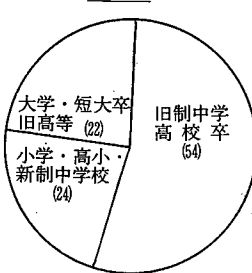
47年12月1日から48年3月末日までの間自動車文庫巡回の際、各配本所主任を調査員に委嘱し、質問紙法により実施した。

その結果調査対象1,000人のうち回答者は662人(男330人・女332人)で回収率は66%であった。なお回答者の構成は図表1のとおりである

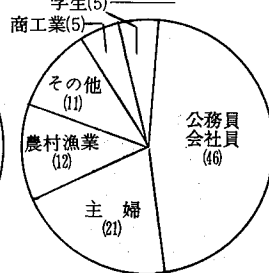
〔図表1〕 回答者の構成



学歴別



職業別



〈調査内容〉

問 この1年間にどれくらい本を読んだか

回答を寄せた人は冊数は別として「読まない」と答えたものは僅かに6%弱に過ぎず、大半の人が「読んだ」と答えている。

更に「読んだ」と答えたものを男女別にみると読書率はそれぞれ95%と変わらず、冊数において男子は約半数が10冊以上で以下1~5冊25%、6~10冊20%の順。一方女子は1~5冊が38%と一番多く、10冊以上35%、6~10冊22%の順である。また学歴別では大学卒98%、高校卒95%、中学卒94%と僅差ではあるが高学歴層が読書率の高さを示している。

職業別では当然のことながら学生が高率で以下商工業、公務員、会社員と続き農林業が最底である。

問 どんな本がよく読まれたか

「読んだ本はどんな本で、その中でどの本が一番印象に残ったか」の間に対して、総冊数では288冊におよんだ。そのうち特に目につくのは、「恍惚の人」が20代以上の各層に非常によく読まれたことである。これだけ読まれた作品は珍しく、マスコミの影響によるところが大きい。この外10代では、名作と現代

若者のアイドルが書いた作品がよく読まれている。

また30代以上では「心」「歎異抄」「生命の実相」などの宗教書と、「新平家物語」「徳川家康」などの歴史小説がよく読まれている。

問 本を読んだ動機はなにか

この解答では、「自分の考えで」31%が最も多く、続いて「図書館（公民館）で」28%、「本屋で現物を見て」13%、「新聞雑誌をみて」11%の順となっている。

自分の考えでの意識的なことを除いては、やはり図書館なり、本屋で現物を見てが多く、手近かなところに図書をおくことが如何に必要であるかを物語っている。

問 どんな目的で読むのか

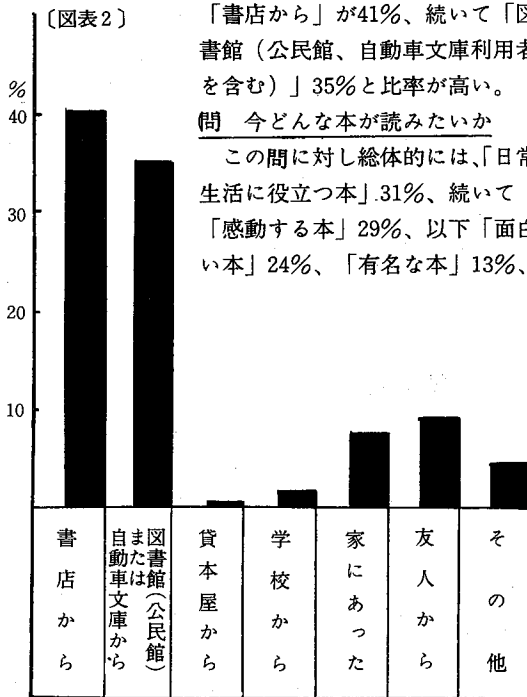
「趣味教養のため」が69%で圧倒的に多く、続いて「職業上の必要から」17%、「調査研究のため」5%と続き「勉強のため」は僅かに1%と低率である。

問 本の入手経路は

「書店から」が41%、続いて「図書館（公民館、自動車文庫利用者を含む）」35%と比率が高い。

問 今どんな本が読みたいか

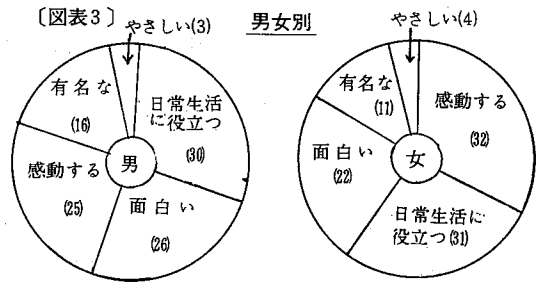
この間に対し総体的には、「日常生活に役立つ本」31%、続いて「感動する本」29%、以下「面白い本」24%、「有名な本」13%、



「やさしい本」3%の順となっている。

この解答で示されるように成人の読書が日常生活に関連していることは至極当然のことであろう。

なお男女別に見ると次表（図表3）のとおりであるが男では「日常生活に役立つ本」が30%、女では「感動する本」が32%で夫々1位を示しているのが目立つ。



問 本を読むのは主にどこで読むか

この間に対してはやはり「自宅で」が、男89%、女85%と圧倒的に多く、「勤務先で」男4%、女9%と続いている。

図書館（公民館）での利用が僅かに1%と低率なのは、調査対象が比較的へき地の自動車文庫利用者限定したためでもあるが、それにも増して地域に図書館なり、公民館図書室の不足を如実に示している。

問 一日のうちいつ頃本を読むか

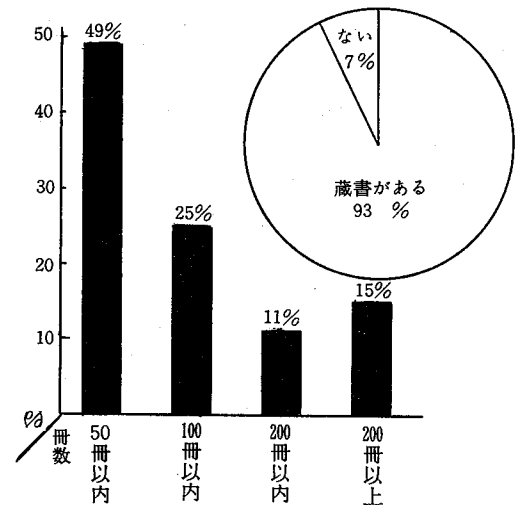
総体的にみて、「20時～22時」(38%)が最も多く、「23時～24時」(26%)と続き、夜半が全体の66%強を占めている。ただ女の場合主婦業の関係もあってか昼間の読書が比較的多い。

問 お宅にはどの位本があるか

(雑誌・教科書・マンガを除く)

「ある」と答えたもの93%、うち「50冊以内」が49%と最も多く、以下「100冊以内」「200冊以上」「200冊以内」の順となっている。（図表4）

図表4



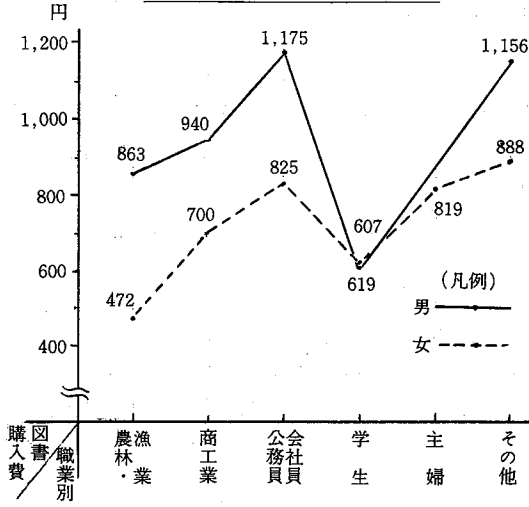
問 一カ月平均の本代はどのくらいか

(雑誌・教科書・マンガを除く)

職業別にみると「公務員」「会社員」が最も多く、以下「その他職業」、「商工業」、「農林漁業」「主婦」「学生」の順となっている。

男が女の図書費を上廻っているのは一般的にみて当然であろう。（図表5）

〔図表5〕 職業別・男女別1カ月図書費

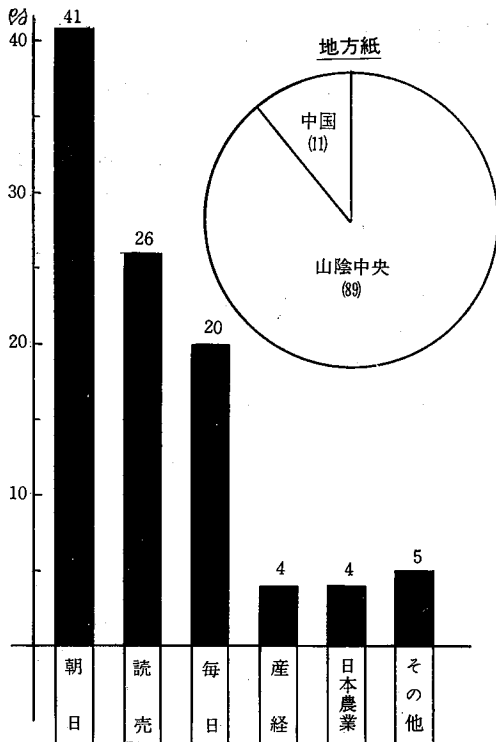


〔問〕 お宅では新聞をとっておられるか

新聞の購読率は、96%と比較的高い。これを地帯別にみると都市近郊農村地帯では、とっているもの98%と高く、純農村地帯93%を上廻っている。また「とっている」と答えたものの中で、「中央紙をとっているもの」は62%で多く、「地方紙だけ」24%、「中央紙と地方紙の両方をとっているもの」14%となっている。

中央紙、地方紙の銘柄別購読状況は図表6のとおりである。

〔図表6〕 中央紙銘柄別購読状況



〔問〕 お宅ではなにか雑誌をとっておられるか

回答総数は28種、520冊に及んだが内訳をみると「家の光」、「現代農業」等が多いのは、調査対象地域が農村地帯が多かったためである。また婦人雑誌については、かなり広範囲に各年代に読まれ購読率についても都市部と比較して大差はないと思われる。

いつも読む月刊誌(ベスト10)

順位	誌名	男	女	計
1	家の光	53	57	110
2	文芸春秋	17	15	32
3	主婦の友	7	22	29
4	若い女性	7	17	24
5	現代農業	15	9	24
6	暮らしの手帖	2	19	21
7	婦人の友	3	12	15
8	婦人百科	4	11	15
9	婦人倶楽部	4	10	14
10	リーダーズダイジェスト	8	2	10

〔問〕 自動車文庫の図書の内容について

「もっと高い水準のものにすることが望ましいか」或いは反対に「低いものでよいか」の問いに対し、「いまのまゝでよい」が男で77%、女で87%と現状のままで満足しているものが多い。

しかし「もっと高い水準のもの」を希望しているものが、男で14%、女で9%とあるのは、図書館側として歓迎すべきことで、今後の読書普及をすすめる上で量的(一般に平易な読みもの)サービスに併せて質的な図書を普及するための指針を得ることができた。

〔問〕 現在自動車文庫には「一般教養書」「実用書」

「娯楽書」の区分で配架しているが希望する図書はなにか。

この問に対し男女共一般教養書を(40%)一番多く望んでおり、続いて娯楽書(35%)、実用書(25%)となっており、実用書、娯楽書に比し、一般教養書の比率が高いのが、前述の「高い水準を希望するもの」と併せて注目される。

なおこのほか、読書に関係あるテレビの聴取時間や、当館が実施している文化事業等奉仕活動に対する理解度についても調査を実施したが紙面の都合で省略した。

以上のアンケート調査結果から得た貴重な資料を基調に、今後の館外奉仕活動をより積極的にすすめ、ご協力にお応えする考えである。

<振興課普及係>

資料を図書館へ

郷土資料として保存し活用します

当館は島根県の中央資料館として、できるだけ多くの資料を収集しようと努力しています。利用者の数も年々増加し、県民はもとより、県外の方々の多くにも用いただいています。

ところで最近、県下の各地で個人の歌集や研究書、あるいは企業体の史誌など、多くの出版物が出されています。当館では、それらのニュースをできるだけキャッチし、収集につとめていますが、いまだ十分ではありません。図書館法によりますと、図書館は、図書館奉仕のため、一般図書の外に郷土資料、地方行政資料などをできるかぎり収集し、一般公衆の利用に供さねばならないことになっています。

近時、郷土に関する資料の利用者は非常に多くなっています。その人々の要求にこたえるためにも、出版物を出された方は、是非図書館へご寄贈願いたいと思います。図書館には専門司書による整理と充実した保存設備によって、大切かつ有効に利用者の皆さんに提供します。そのことは、きっと出版された方々の趣旨にそうものと考えます。

なお、郷土の出版物ニュースをご存知の方は、当館へ是非お知らせ願います。

当館では、島根県下で出されたあらゆる出版物をことごとく整備して、利用者に万全のサービスをすることを理想にしています。

「さすが島根県立図書館だけあって、島根県下の出版物は全部そろっている」
そのような図書館を夢みております。皆様のご協力をお願いいたします。

連絡先 690 松江市中中原町52 奉仕課資料室 TEL22-5742
島根県立図書館 全 整理係 " 22-5733

視聴覚係からおねがい

16ミリ映画フィルムの取扱いについて

図書館には現在、他からの預かり分もあわせて、813本の16ミリ映画フィルムが保有されており、毎月約400本が利用されています。

ここ数年、フィルムの利用も着実に伸びてきており大変喜んでいますが、反面これの取り扱いが正しく行なわれていないことに気づきます。ここにそのいくつかを紹介し、今後こうしたことがないように注意していただきたいと思ひます。

(1) リーダーフィルムが極端に短くなっている。

これは、最近16ミリ映写機にオートローディングが普及し、フィルムの先端が切られるからです。フィルムの先端が痛んでいる場合はどうしても切らざるを得ませんが、必ず1こまず切るようにしてください。

(2) フィルムケースに間違ったフィルムが入っている。

同時に2本以上のフィルムを上映した場合こうした間違いが起こります。フィルムをケースに取める時は、題名をよく確かめてからにしてください。またケースから出したフィルムは、できるだけケースといっしょに移動するよう心がけてください。

(3) 新しいフィルムにすぐ傷が入る。

傷が入る一番の原因は機械の整備不良であり、特に清掃が正しく行なわれていないことにあります。映写終了毎にアパチャープレート、プレッシャープレートの清掃を習慣づけてください。

以上ですが、今後16ミリ映画フィルムがいつも正しい状態で利用できるよう、お互いに心がけていただきたいと思ひます。

また図書館では、映画教材をもっと身近かに利用してもらうため、できるだけ皆さんからの要望に答えられる内容になるよう努力しております。どうか、忌たんのない意見をお聞かせください。